

平成28年度 第1回
北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会
議 事 録

日時：平成28年8月25日（木）

13時50分 開会

場所：ホテルホールスター札幌

多目的ホール A（札幌中央区）

平成 28 年度 第 1 回北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録

会議名	平成 28 年度 第 2 回北海道立総合博物館協議会アイヌ文化研究センター専門部会
開催日時	平成 28 年 8 月 25 日（木） 13 時 50 分～15 時 25 分
開催場所	ホテルポールスター札幌 多目的ホール A（札幌市中央区）
出席委員数	5 名出席（欠席 1 名）

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・丸括弧で補足的な説明を記した。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

目 次

1	開会	1
2	アイヌ民族文化担当副館長あいさつ	1
	《資料確認》	1
	《出席状況確認》	1
	《事務局紹介》	1
3	議題	2
	《加藤部会長あいさつ》	2
	議題（１）報告事項 1 平成 28 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会の結果について	
	議題（２）報告事項 2 アイヌ民族文化研究センター平成 27 年度事業実績及び平成 28 年度計画について	2
	《質疑応答 1》	3
	《質疑応答 2》	5
	《質疑応答 3》	6
	《意見交換 1》	7
	《意見交換 2》	7
	《意見交換 3》	8
	《質疑応答 4》	8
	《質疑応答 5》	9
	《意見 1》	9
	《意見 2》	10
	《意見 3》	10
	《意見 4》	11
	議題（３）今後のスケジュール等について	11
4	閉会	12

1 開会

右代学芸主幹 定刻となりましたので、ただ今から平成28年度北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会を開催いたします。本日の司会進行につきましては、事務局の右代が担当いたします。開催にあたり、中村亘アイヌ民族文化担当副館長より御挨拶を申し上げます。

2 アイヌ民族文化担当副館長あいさつ

中村副館長 専門部会の開催にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。本日はお忙しい中、また、遠路ご出席いただきましてありがとうございます。心から御礼申し上げます。昨年の4月にリニューアルオープンした北海道博物館ですが、初年度は15万人の来館者をお迎えすることができましたし、日本展示学会の作品賞を受賞することができました。今年度に入り、いまのところ5ヵ月で6万人を超える来館者をお迎えしております。その中で、「第2テーマ アイヌ文化の世界」ですが、伝統的な生活文化だけではなく、「現在」にも言及をしているということ。言語や文芸、芸能などにもウェイトをおいていること。それから動画や音声、手で触れることができるハンズオン資料を多く配置しており、好評いただいていると受け止めております。また、昨年度は統合リニューアルということがありましたので、開催を見合わせておりました、アイヌ文化巡回展を再開しました。現在、枝幸町のオホーツクミュージアムえさしで「アイヌ語地名を歩く」をテーマに開催しておりますし、開催中にはアイヌ文化入門講座や、アイヌ文化講演会も実施しております。10月には同じように、美幌町的美幌博物館で開催する予定をしております。終わりになりますけれども、アイヌ民族文化研究センターの運営、あるいは計画や目標における関連項目に関して、忌憚のないご意見をいただければ幸いに存じます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

《資料確認》

右代学芸主幹 それでは、配付資料の確認をさせていただきます。

〈以下、配付資料の確認〉

《出席状況確認》

右代学芸主幹 委員の出席状況について、ご報告いたします。今回は、関根委員が欠席となっております。北海道立総合博物館条例には、専門部会開催の必要出席数についての規程はございませんが、条例第25条第2項に準じて、委員総数の2分の1以上の出席となっておりますので、本日の専門部会は成立している事をご報告いたします。

《事務局紹介》

右代学芸主幹 4月に環境生活部文化振興課、アイヌ政策推進室の担当が変わりましたので、ご紹介いたします。アイヌ政策推進室の丹羽主幹でございます。

丹羽主幹 環境生活部アイヌ政策推進室の丹羽でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹 文化振興課の林主査でございます。

林主査 環境生活部文化振興課の林でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹 昨年4月に採用となりました、当館アイヌ民族文化研究センター職員をご紹介します。

遠藤研究職員 遠藤と申します。専門はアイヌ文学で、特に沙流地方の英雄叙事詩を研究しております。よろしくお願いいたします。

大坂研究職員 大坂と申します。民具資料の整理を担当しております。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹 どうぞよろしくお願いいたします。それでは、今後の議事進行を加藤部会長に
お願いいたします。部会長、よろしくお願いいたします。

加藤部会長 議題１と２がありますが、議題１と２を続けてお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

小川センター長 アイヌ民族研究センター長の小川と申します。報告が続きます恐縮ですが、最後

にアイヌ民族文化研究センターの方で、今年度どのような事業を計画しているのかにつきまして、8月ですので、すでにある程度行っているものもございしますが、これからこうしていきたいという事も含めて、ご説明できればと思います。資料2「北海道博物館 平成28年度計画」の10ページ、「アイヌ民族文化研究センター事業計画」をご覧ください。

〈以下、資料2に沿って平成28年度計画を報告〉

加藤部会長 ありがとうございます。それで、全体的に今説明あったとおりですが、ご質問がありましたらどうぞ遠慮なく。時間はたっぷり1時間あります。

《質疑応答1》

大島委員 数字のことで聞きたいのですけども、(参考資料として配付した)「平成28年度計画における計画値の根拠」というところです。平成27年度の実績値があまりにも高すぎる。高すぎますよね。そうすると、計画値はそれでまた減らしてしまったわけですよね。それは、なぜ高かったのかという説明がない。説明があって、それでこれは特例だという理屈がやっぱり必要だったと思います。わかりませんが、総合展示の所に特別展示利用者数が含まれているのか、いないのか、その辺りもわからないので、はっきりさせていただきたい。昨年度は、『夷酋列像展』が5万ぐらいあって、その数字を入れ込むと特別に多すぎた。例外的な年だという説明がつくと思うのですけども、特別展示のところも同じですけども、(計画値より昨年度の実績値は)4万人ぐらい多い。ということで、やはり何らかの説明がないと、数字あわせをしているのではないだろうかと、一般的に見られてしまうと思います。それで気持ちは分かりますが、昨年度は特例だ、例外的だという説明がないと、まずいなという気がしましたので、第一点がそこを説明していただきたい。総合展示に特別展示の来館者数字が入っているかどうか。

右代学芸主幹 総合展示の方には、特別展示の数字は入っておりません。特別展示の方は、特別展示の方でカウントしている数字でございます。ただ、4月にオープンしたということで、オープン景気がかなりありますので、その流れから言うと、年間15万人というのは、過去においての実績の数から設定した総合展示の利用者数という形で、平成27年度の目標というのが72,400という数値を設定してたわけですが、実際には、実績値としては、149,046人という、約15万人が入ったということです。それでは平成28年度と一緒に数字を上げていってもいいかという事になりますと、そうではないくて、平成27年度の目標数値に従って10%という計画数値を上げっていったということでもあります。

大島委員 それはわかっておりますが、倍以上ですよ。初年度効果というのが色々なものにあるという事はわかります。その時に何月頃まで非常に多かったのかとか、そういうことが問題になってきますよね。ずっと1年間続いて多かったら、それを初年度効果とは言えないわけですから、月別にちゃんと分析をして、それが例外的な理由だということで8万、あるいは72,400人という(平成27年度と)同じ目標の設定ということであればわかる。そうではなくて、この説明だと、5カ年でそれを割ってというふうに言っていて、いかにも役人的な発想なので、私はそういうのは嫌いなので、質問するのですが、やはり説明は必要だと思います。そういうのがないと経営的にはまずいと思う。その辺りは分析しないといけないと思います。

右代学芸主幹 分析した結果というのは、総合展示についてのクローズアップ展示とか(スマートホンの「ポケット学芸員」による)多言語解説、あるいはミュージアムトークとか、総合

展示の中で様々な事業をやっております。その増というのも考えられますし、普及行事の強化ということで、かなり普及行事も強くやっております。その中で戦略的に、どのようにお客さんに入って貰うかというものもあります。特別展も、特別展だけを見るのではなく、総合展示を見た人もいるだろうというのは、当然ご理解いただけるかと思いますが、そういった波及的な効果も含めて。

大島委員 それはチェックできないのですか。私そのように思ったんですよ。特別展示を見に行きました。それで総合展示を見に行きましたということの効果で、かなりの数が説明できるのではないかとということで、その辺りを分析しないと、例外の説明はできないんです。

右代学芸主幹 そのとおりです。

大島委員 だから、訊きました。数値的には特別展示は利用者数をとったというのはわかります。それが総合展示にまるまるいったとしたら、『夷酋列像展』の場合には5万1千位いくわけです。そうすると数の上で、だいたい合うわけです。それで平成27年度に14万を達成したということは例外的だと。だからその数字を根拠として、平成28年度の目標値は立てないという理屈になる。

右代学芸主幹 そのとおりです。そういう形で、数値の問題というのが5年間とおした中で、年度の中の10%増というのが妥当でしょうというのが、今回の数値目標の一つの8万という数値になっているわけです。

大島委員 でもそれはここには書かれていないよ。意地悪ですが、書かれてないよ。それを書かないとだめだと思う。それで、特別展示の中の『夷酋列像展』のせいで、実績が倍増近く4万ぐらいに増えているのも、そのせいだと考えてよろしい。それをマイナスすると、あのような大きいものは今年度ない。非常に魅力的なものはないということ、この目標値の数値で良いと思います。例外的である説明が必要。全部『夷酋列像展』だと私はみたのですけども、その読みでよろしいですか。

右代学芸主幹 一概にそのような捉え方もできないんですね。今年は（特別展に）『ジオパーク展』というのがありまして、やはり広報的なものとか、様々なものに力を入れておりますので、やはり総体的にはどこまで（特別展の利用者数が）伸びるのかというのはわからないところですが、かなりの特別展をやるところの効果というのは、実際にやってみないとわからないところで。

大島委員 その『ジオパーク展』の実績は、先程6万になりましたと言っていましたよ。

中村副館長 いいえ、それは総合展示の方です。

大島委員 博物館の時に難しいのは、（お客さんが）特別展に来て流れていくんですよ。その数は、北方民族博物館の時もそうだったのですが、特別展をやると総合展示の方が増えるんですよ。流れてしまうんです。それは良いことだけれども、しっかり把握していないんですよ。それをやらないと、経営的な分析はできないと思うんですよ。前からそのように感じてたのですけれども、その方法がないときちんと見えなくて、ただ数字あわせではないのかと思われてしまうんですよ。

右代学芸主幹 実際にはそうではないのですが、比較的にはですね、『夷酋列像展』の場合は総合展示を見る方が非常に少なかったというのが現状です。今回の『ジオパーク展』に関しては、逆にいうと、両方見ていると、やはり展示の仕掛けによって、流れは全然違います。

大島委員 それは総合展示の中に、『夷曾列像展』に匹敵するものとか同じものがないからですよね。『ジオパーク展』の場合には総合展示の中にあるのですか。ですから、そういう要素をきちんと分析していかないと、できれば数字として、例えば特別展に入った人が総合展示に流れているかどうかをチェックするようなシステムを作るとかね。会社とかお店ではそこまでやっている。

右代学芸主幹 そのこのところも、今回の『ジオパーク展』については、両方のところを見て頂けているというのが現状です。言い訳になってしまいますが、前は実行委員会で常設展と一緒にペア券というのが作れなかったということがありまして、これは北海道新聞と事業共催でやったもので、その所がうまくカウントできていないというのもございますけど、比較的には流れていないというのが、去年の状況でございます。

加藤部会長 大島委員の言うことも一理あるので、その事を今後の参考にしながら、どうあるべきか考えていった方が私はいいと思う。事業を繁栄させることと思います。そのほかに何かありましたら。

《質疑応答 2》

大島委員 もう一つ。海外の博物館との共同研究プロジェクトということで、新聞に大きく2つ報道されていました。非常に宣伝効果があるということで、サハリンとカナダのアルバータにいて（報道が）ありました。カナダ・アルバータの共同プロジェクトの名前を見ると、「寒冷地の自然と適応」となっていて、北海道とアルバータの場合に、道との姉妹州ではあるけれども、自然環境は違うと思うので、「寒冷地の自然と適応」という広い括りで具体的にうまくできるのかなという不安があります。北海道は同緯度でありながら、昔の氷河期の頃から非常に寒冷的な地帯なんですよ。もう少し緯度の高いところと同じぐらいの自然環境をもってきた歴史があって、それとアルバータだと、暖かすぎるのかなという不安があるので、その辺りをうまくやらないとまずいかなと思います。

小川センター長 ご指摘と言いますか、ご心配は全くその通りのところもございまして、タイトルをこういった形にしているので、北海道とカナダを同じ寒冷地として括って、その比較研究をやるようなイメージがありますけれども、私どもの内部で議論した時にも、実際に当館の博物館職員がそれぞれ持っている研究テーマとの関係もありますので、直接お話があったような比較研究というようなものを本格的にやるのはなかなか難しいだろうというところはございます。そういう意味では少し視野をかなり広めに持って、それぞれの地域のそれぞれの博物館が行っている研究の場、あるいは博物館展示の場に、相互の職員を派遣して、そこでそれぞれのテーマの研究をやる。あるいは、お互いの博物館の仕事を見ていくことで、それぞれの博物館の経験値のようなものを上げられないかというところを、実際的には狙いにしています。今年度は私ども北海道の方からカナダに2名派遣するという予定になっておりまして、カナダ側からはですね、ちょうど今相手の博物館が全面的にリニューアルをしているところであって、そのリニューアルする中の先住民族に関する展示については、博物館とカナダの先住民の代表とで議論をしながら展示を作っているところで、その議論の場というところに、北海道博物館の職員も立ち会うというか、見させて頂くというような機会を設けていただくという形で、今年度は計画をしているところです。

大島委員 例えば、樹木とか木とかの利用だとまだ接する部分があるので、そこは行けると思

うけれども、それ以外の寒冷地の文化要素となると、かなり違うので、うまいこと調整した方が私は良いような気がします。

小川センター長 そのとおりです。ありがとうございます。

加藤会長 お二方に説明をしていただきましたけれども、他に何かありませんでしょうか。私は簡単に言うと、積極的にやるんだなと思って聞いておりました。児島先生、何かありませんでしょうか。

《質疑応答 3》

児島委員 質問です。私は全体の協議会にも出させて頂いたので、お話を伺うのは2回目なので、少しわかった気がしてたんですけど、改めて質問したいことが出てきました。資料2の目次の所をご覧いただくと、11番に、博物館ネットワークというところがありまして、博物館全体の説明が5ページのところに書いてあります。しかし、アイヌ民族文化研究センターとしてはそのところがどうなのかという括りでの説明は、資料的には項目としてはないんですね。それがどうなっているのかなというので、例えば11ページの今回ご説明いただいたところが11ページから始まってですね、それから、巡回展の説明がありました。巡回展の説明の1行目に、道内市町村と協力してやる。博物館ネットワークと云々というのは、道の博物館として地域の博物館とネットワークをつなげてやっていきますという話なんですけど、ここに書いてある道内市町村等の協力というのは、道内市町村の博物館というのとはちょっと違うのではないかなと思いました。そして、2行下に地域的なバランスや地域のニーズというのも考えて、地域を選定します、というような事も書いてあります。その下の調査研究事業の所でも、道民地域との共同連携による地域情報集積プロジェクトの内容が良く解らないんですけど、それらしい事が所々に出てきているんですけど、4番の資料情報との公開提供事業も、会長がおっしゃったように、本当にいろいろな事業を展開する事になっているんですが、4番の所での地域連携、総合博物館のセンターとしてやることというのは、すごく沢山よく考えられて、職員みんながすごく努力をしている事が、ひしひしとわかる。研究調査事業について、12ページのそれを公開していくというところでも、公開していくことが普及していくというところがあるんですけども、そういうのも地域の博物館、道の博物館と、博物館のアイヌ専門のセンターとしての地域連携の部分というのは、どうなっているのかというのを改めてご説明いただけませんか。

小川センター長 そういう意味では資料のそれぞれの項目が、きちんと対応していないところもあるので、分かりにくいかと思います。博物館のネットワークと言うのは、なんだかんだ博物館という単位でネットワークをつくっていくので、その中のこの部分だけというものが、特に今はアイヌ文化については、アイヌ文化担当の職員を置いているところが、道内で殆どないというようになっている。それでいくと、アイヌ文化だけでネットワークを組もうとすると、ネットワークを組める直接の相手というのは限られていて、むしろ児島委員からのお話の最後にあったように、色んな地域の市町村にアイヌ文化関係の資料がありますと。だけど、専任の職員がおられません。その場合、アイヌ文化の資料に関わって、何らかの専門的な知識に基づく対応を求められる場合も出てきました。さあどうしましょう、というようなところに関わっては、はっきりとしたネットワークを作っているわけではないですが、様々な形である種の相談窓口としての機能というものを、期待されているのだらうなと思っておりますし、これから

果たしていかなければいけないところだと考えております。今すぐ形になるということではないのですが、今実際にそれぞれの市町村で持っているアイヌ文化の資料について、中身がよく分からないとか、扱い方がよくわからないというようなことに関しては、今実際に色々な形でご相談を頂いたりしているので、今後そういったものをインフォーマルな状態のままで動かしていくこともありえますし、何らかの形で、道内のアイヌ文化に関する博物館のネットワーク的なものをつくることもありえるかと思いますので、その辺りを今後考えていきたいなと思っております。

《意見交換 1（質疑・応答 3 に関して）》

児島委員 5 年間の中期計画のうちの平成 28 年度の年度計画ということですが、小川センター長が今おっしゃったような事はどこかに書いておいた方がいいのと、地方では専門の職員さんはニーズがあっても予算上置くことができないとか、色々な問題がきつとあるのでしょうか、そういう事になっているという状況報告ではないですが、現状という説明はあった方が、ここでみなさんとお話する時も、そういうのも加えて頂けたら良いのではないかと思います。全体の印象として、センターでは色々な研究をするけど、アイヌの資料というのは地域地域で、これは大きな問題になるかもしれないけれど、道の総合博物館のセンターに、道内全ての情報が集まっていれば良いというわけではなくて、やっぱり地域に、資料もこれまで大島委員も関わってらした民俗調査とかの成果を地元におくという事も考えないといけないので、そういう事に対する、北海道博物館のセンターの役割というのも考えて頂きたい。

大島委員 ただ行政ではなかなか難しくてですね、僕たちの報告書も全部アイヌ協会の支部単位で送るしかないんですよ。それが一番確実で、博物館に送っても利用されないし、それを紹介する人もいない。かなり問題ですよ。小さな図書館やら、例えば弟子屈の図書館に膨大なノートがあったりとかですね、そのようなのを見つけても、僕らはコピーして来たりしたんですけども、知らない人は全然知らないわけですよ。そういうのとかって結構あるんですよ。でもそれは誰も知らないし、本当は中央のどっか、今度国立博物館ができるからそういう所に集まるのかも知れないけれど、組織的にコピーだけは全部集めるとか。国会図書館並に、アイヌ国会図書館ではないですけども、そのような感じのものを作らない限り、どこかに 1 か所に集めておかないと、いずれ情報が全部なくなります。

加藤部会長 今の児島委員の意見も貴重だと思うしね、これからの話だと思う。大変いい話をしていただいたなと思うので、これを記録にしておいた方がいいのではと言っているのは先生だからね。私もそう思う。これからの話なんだけど、アイヌの事で、では地域がどうであるかも含めてね。

大島委員 ただ、資料がどこにあるのか分からないという状態は、ずっと続いているんですよ。何の資料がどこにあるのかを全然知らずに来ているということ、やはり認識してどこか 1 か所に集めておかないと、取り上げろと言っているわけではないですよ。情報だけはここに何がありますという所在確認、先程小川さんが言われていましたけれね。これすごく大事ですよ。では、それをどこがやるのですか。

《意見交換 2》

大島委員 質問をしたいと思っていたけれども、国立の白老の博物館ができるのと、道の関係

ってどうなりますか。今度そこが取り合いになって、何か変なことにならなきゃといいけどな、と思っています。

加藤部会長 うちとしては考えは別かもしれませんが、そのように議論して来いといって頂けるだけでもありがたい。過去にそのものがないのだから。今とりあえずこのテーブルでね、そのように言ってくれるだけでまずいいの。そう言ってくれる事を記録に残して、だったら将来についてこうやろうという事に繋げていった方がいい気がする。今いっぺんに広げて、できないと思う。先程も（小川センター長が）話したように、学芸員がいないんだから。それぞれの専門の（人が）誰もいないのだから。だから、これから先の話だなと思っております。そういう意味で、大島委員や児島委員に良い意見を言っていていただいて、本当にありがたいなと思っています。

小川センター長 みなさんがおっしゃる事で、本当にそのとおりです。国の博物館との関係はよく色々な所からご質問を頂くところです。ただ、まだ国の博物館そのものが、直接できていない、あるいはできてからの事業の方向性を今議論している最中だという事もありますので、今のところはお互いに協力し合っという事になりますし、その場合は恐らく道内に関しては、主に道立の博物館というものが一定の役割を果たして、そこから更に広く、国内国外というところを見渡すところはなんだかんだいって、国の博物館というものが主に力を尽くしてという形で、お互いに連携しながら情報の共有を図っていく事が大事だなと思っていますので、そのような方向で進めていきたいと考えているところです。

加藤部会長 ありがとうございます。では展示の関係で、総合展示とか色々企画されているようで、すごいなと思いながら見てたけど。児島委員はどう思われますか。

《意見交換3》

児島委員 それに関連して言えば、全体の会議でも言いましたが、すごく沢山の事をされてみなさん働き過ぎではないですか。計画はすごいけど、大丈夫ですかと心配をしてみます。

加藤部会長 素晴らしいと思います。まずは、前向きにこうするんだという、まずはそれだけでも素晴らしいと評価しているんだけど、それについて何がご意見ないですか。小川さん。

小川センター長 基本的に新しい博物館としてスタートをしてまだ2年目という事もありますので、前向きというより、今のところは、やはり出来上がった新しい博物館であるということで、こういう事やこういう事やしていきたいというような方向性を出しているので、どちらかと言うと、色々なところに関して意欲的というようになるのかなとは思いますが。ちゃんと寝る時間をとってやるように致しますので、尚且つその中で、出来ることを出来るところから順番にやっていくというようにして、積み上げていきたいと思っています。今日頂いた意見も含めて、また改めて次年度以降の事業を考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします

《質疑応答4》

加藤部会長 意見交換なので、澤田委員、何かありませんか。

澤田委員 さっき児島委員のおっしゃっていた、年度計画の学習・伝承の支援のところで、私はホームページを開いたことはありませんが、ホームページを開くと「アイヌイタク」とか祈り言葉とか、全道の祈り言葉とかが出てくるのですか。

小川センター長 いいえ。今のところは、そこまではいっておりません。

澤田委員 カムイとか、そういう形の、コタンコロカムイなら男性、女性とか、シリコロカムイなら男性か女性かとか、そういう事を知りたいければ、ホームページに出てるのですか。

小川センター長 インターネット上に載せている事でいくと、まずは一般的な学習のための情報を載せているというのが中心なので、沢田委員のように、実際に我々はこういうことをやりたいという時の、いわゆる実践的な情報はまだこれからというところですよ。ただ実際に例えば電話などでそういった事について、ご相談や問い合わせを頂いていることありますので、その話は全然知らないよということではなくて、ネットに載せるものは、多くの人が学ぶ情報から載せていき、そういった具体的なことに関しては、電話などでお問い合わせを頂ければ、なるべくお答するような形で対応しているところです。

大島委員 でも、先程説明にあったように、将来いろんな民俗資料も含めて、そういうのをインターネットに載せるようなプロジェクトはあるということですよ。

小川センター長 載せたいとは考えております。

大島委員 一朝一夕には行かないので、難しいですね。

小川センター長 アイヌ政策室との予算の相談など、色んなことを含めて今後考えていきたいと思っていますところですよ。

澤田委員 私としては、今まで道内にいた何人かの古老たちのイタクとその説明が書いてあるものが、ホームページに載るとすごくいいと思っています。

《質疑応答5》

澤田委員 あと一つ質問があります。協議会の議事概要（資料4）のところで、2の展示のところで、高齢者に対する取り組み、他の取り組みを考えていきたいと書いてありますけど、どのような取り組みでしょうか。

右代学芸主幹 これは難しい話ですね、バリアフリー化をして、様々な高齢者対応をしてるわけですが、それから更に増える高齢者の対応をどのようにするのかとか、質問の中でも出てきたことで、それについては具体的なものというのはまだ検討しております。

舟山学芸部長 補足させていただきます。昨年度のところなんですけども、北海道博物館協会のところの、（北海道博物館協会と言うのは）北海道博物館が事務局をやって、全道の博物館が集まって、研修会などしている組織ですけれども、その中のミュージアムマネジメントの中で、高齢者の話をさせて頂いております。例えば回想法の実例などを上げて、地域の高齢者のみなさんが、博物館にどうやって関わっているのかというような実例を交えてお話いただくなどして、私どものはっけん広場等々、あるいは総合展示場内の実際に触れる展示、そして懐かしい物の展示というような回想法などが、高齢者を含めた対応として、実践的にどういうものがあるのかということ、研修会で検討しているところでございます。

《意見1》

澤田委員 昨年、『夷酋列像展』を見て思ったのですが、ここ（資料4）にも書いたけども、暗すぎるとか、字が小さい。やっぱり、見て結構（進み方が）遅いんだよね。ちょっと複数（人が）いたらイライラして、スッと違うところ行ってしまう形になるけども、それだったらはっきり言って高齢者に優しくはないよね。だから通路で工夫するとか、そういう形とっていった方

が良いのかなと思う。やっぱり若い人がいたら結構見るのが早いから、その辺を考えた方がいいと思う。

大島委員 パネルが小さい。字が小さい。

澤田委員 かなり前に行かないと見えない。

大島委員 ガラスごしだと、もっと見えない。

右代学芸主幹 『夷酋列像展』は、私が担当したもので、パネルとかは私が全部ミスしたものです。その対応の中で（文字を）大きくしたりとかしてるわけですけど、なかなか展示の状況ですぐ対応できなかったということがあって、そういった意見が多かったです。その辺りは、反省をして進めなければいけないところだと思っております。

《意見2》

加藤部会長 「夷酋列像」自体はどういう感想が多かったですか。

右代学芸主幹 歴史的な背景を知っているところ、地域地域によって全然違います。例えば松前の方であれば、クナシリ・メナシの戦いすらわからない。ただ、「夷酋列像」を知っているというのが一般的です。根室や釧路の方に行くと、クナシリ・メナシの戦いは知っているけれども、夷酋列像を知らない。そういうようなことで、地域の人に来て、そこら辺の歴史的なものなり、いろいろ知って頂いたことは、当時のアイヌの文化的なものも含めて、知って頂いたとかなり評価できるのかなと、私個人は思っております。

加藤部会長 個人でそう思っているんですね。一つ言わせていただくと、私としてはあの中で負の話をきちっとしてもらわないといけない。負の話を全然しないで、「夷酋列像」だけの話して、美しくしたってね、それはものにならない。やっぱり負の話をきちっとね、どういう理由でこれがこうなったかということについてきちっと説明がなってない。だれもしてないの。だから、クナシリ・メナシ（の戦いの歴史）がわからなくなっていくんだよ。そこら辺をこれからやっぱりね、北海道博物館としてはね、都合の悪いところは言わない、都合の良いところは言うとか、それではだめと思う。人を集めるだけが能ではないから。そうではなくて、歴史をちゃんと見極めて、その元で道民や国民が歴史をちゃんと理解できるんであって、都合の悪いところは見せない、都合の良いところだけ見せるのでは、北海道博物館の役割としては失格だと思います。その辺、今後気をつけてやってもらった方がありがたい。

右代学芸主幹 そうですね。国立歴史民俗博物館とか大阪の国立民族学博物館を含めてやって、民族学的な立場の（博物館での）展示と、歴史学的な立場の（博物館での）展示と、それで北海道では、クナシリ・メナシの戦いと「夷酋列像」の関係を広められたのは非常に良かったかなと思っております。

《意見3》

加藤部会長 今回北海道150年に向けて、どうしようにするかということで、100年とは違って、この前会議が二回持たれたけども、きちっとアイヌのことを位置付けることを、みなさん一同に話してる。アイヌの歌や踊りも全て、歴史的な背景も含めて。一同に話しているんですから、北海道博物館としてどうあるべきかという事に続いていくと思う。私としてはね。その席の中で、一番後に言わせてもらった。ポー川遺跡を見て欲しいと、知事に伝えた。見ないとわからないから。これは文化庁にも言っている。文化庁の審議官にも言っているし、局長

にも言っている。多分局長も標津に二人来ると思う。そうでなければ、文化がちゃんと開かれないんだ。あの場所で何が見られるのかということが、アイヌにとってはものすごく貴重な話なんです。竪穴式住居跡が 4,400 もあるんですから。あそこで見るものが歴史的な背景からものすごく貴重だ。それが北海道を語る、1つの土台になる。青森のあれとは全然スケールが違うよ。ですからそういう意味では、北海道博物館としてどうあるべきなのかということが、これからの議題になっていくかと思います。よろしくお願いします。

右代学芸主幹 ありがとうございます。私は北方四島とか行って、クナシリ・メナシの戦いに関わるアイヌのチャシとか、そういうのも確認して来ておりますので、私もそういう認識に立っております。

加藤部会長 今回北海道の日を 7 月 17 日にするという話があった。8 月 15 日ではなくてね。これは松浦武四郎が命名したことから行くと言ってますから、松浦武四郎を土台にしてやるくれる事は非常にありがたいなと思っています。とても感謝しています。大島先生、どうですか。もう何かないですか。

《意見 4》

大島委員 あまりないのですが、例えば、『ジオパークへ行こう！』を見ると、アイヌの文化が独自に展示されたり、解説されたりするのと、全体の歴史の流れの中に組み込んで、きちんとされているというところで、これはどうなんですか、今まで開拓記念館の展示の中にあったことなのか、それとも総合博物館という形になったおかげで出てきた事なのか。私は後者のような気がしたんですけど。その辺りが、博物館として違っていく事なのかなと思いました。そうすると開拓の歴史も含めて、必ずそこにアイヌの文化とか、関わりとか役割とか、そういうものが、総合博物館としては必ず出てくるんだと。それが総合という意味だと。歴史博物館ではなくて。総合博物館というのは、そういう意味だと捉えてよろしいですか。自然となんとかとなんとかというようにバラバラにあるのではなく、それを総合されて機能していくという意味ですよ。その辺りはやっぱりちょっと見たときに、そういうふうにアイヌ文化をもう一つ歴史の中にきっちり当てはめようとしてるんだなということが見えているので、できればそれをずっと、色々な展示につなげていった方が私はいいと思うんですよ。どうしてもアイヌのこれだけ取って、アイヌのこれだけ取って、自然とか北海道は北海道で取ってとかというようになっちゃう。今までの博物館はそうだったと思うんですけど、そういうところがなくなることが良いのかなと思います。

加藤部会長 そういったことを参考にしながら、これから始まっていく話だと思いますけど、酒井委員何かあります。

酒井委員 ないです。

加藤部会長 他にこれだけは言っておきたいということはないですか。なければこれで終了したいと思います。事務局の方、今後の予定の関係で何かありますか。

議題（3）今後のスケジュール等について

右代学芸主幹 今後のスケジュールについて、ご報告させていただきます。今後のスケジュールにいて A4 の 1 枚の資料があるかと思いますが、今年度については、8 月 10 日に北海道

博物館の全体の協議会が行われまして、本日アイヌ民族文化研究センター専門部会が開催されました。今後は、3月頃に博物館協議会の2回目を開催したいと考えております。その中には、北海道博物館の内部評価を行いながら、3月に行う第2回の方で、いわゆる外部点検をしていただいて、今年度の協議会全体は、終わらせて頂きたいと考えております。このような日程で進めさせて頂ければと思います。平成29年以降に関しましては、平成29年度は中間報告ということで、外部評価の5ヵ年の中の間年の評価を、お願いしていく形になります。一応このような予定でございますが、開催時期を含めてご相談をしながら、開催していければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

加藤部会長 ありがとうございました。

4 閉会

加藤部会長 それではこれもちまして終了したいと思います。皆様、お疲れ様でした。